



Title	ベルクソンにおける生成と身体性
Author(s)	杉山, 直樹
Citation	カルテシアーナ. 1995, 13, p. 23-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66960
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ベルクソンにおける生成と身体性

杉 山 直 樹

1 序

ベルクソン思想の展開において『物質と記憶』が占める位置を再検討する。最初に結論を先取りする形で私たちの見通しを述べておきたい。

確かにこの第二の著書は、『試論』が残した問題を採り上げなおすべく試みられた書である。しかし、その問題とは正確に言って何についての問題だったのだろうか。心身関係、物質論。勿論その通りである。実際それらの問題は『試論』においては消極的な扱いしか受けておらず、追って主題化されるべき空隙をなしていたと言ってしまう。ただ、そう考えるだけでは次の点は顧みられないままになる。つまり、『試論』の主題であった「純粹持続」についてはどうなったのか。奇妙なことだが、『試論』執筆中から構想されていたという『物質と記憶』には、「持続」や「質的多様性」などの『試論』の中心概念はほとんど登場しない。『試論』は一つの完結体であり、『物質と記憶』はまた別の問題領域に向かう別個の論考であるかのようにである。しかしこれらの著作を結ぶのはそのような外面的補足関係ではありえない。

まさに『試論』が展開した持統論の延長線上にあるものとして、『物質と記憶』は読まれるべきであり、また読まれ得る。そしてこの点を追及してみるならば、『物質と記憶』に至るベルクソンの歩みは、単に「我々の自由の、物質的存在の内へのはまり込み⁽¹⁾」の探求に留まるものではないと我々には思われる。

この点に関しては、『物質と記憶』以降確定していくベルクソン哲学の自己了解に着目してもよい。『試論』と『物質と記憶』においてベルクソンは「もの close」と「進行 progres」の対立を語っていた(74, 119, 266, 271, 302など)。「もの」とは、空間中の位置であったり、外的対象であったり心的状態や観念であったりするが、ともかく静的な自己同一性を具えた存在の総称である。さて、それに対して運動そのものを指示しながらもいささか漠然とした「進行」の語は、『創造的進化』ではより伝統的な「生成」という語に、あからさまに取って代わられる。⁽²⁾つまりこの段階でベルクソンは意識的に哲学史の中で自らを規定するに至ったと言ってもよい。

そのベルクソンの哲学史を彩る二つの流れは、「生成 devenir」の哲学とそれに対立する「形相 forme」の哲学(747-762)であった。やや説明が必要かもしれない。「形相」はここでは生成に対立する「もの」一般という広い意味を覆う語であり、プラトンの「エイダス」(761)から発する存在概念の系列を指示している。「何ものかがそれであるところのそれ」一般を、ここでベルクソンは「形相・もの」の語で指示しているのである。⁽³⁾この対立を簡単に図式化すればこうなる。形相の哲学は生成するこの世界を、形相的∥理念的な不動の存在の「欠如 privation」(1260)として理解する。「動きよりもより多くのものが不動にはある。不動性から生成に至るのは、減算 diminution ないし減弱 atténuation によってである」(763)。消極的継起に過ぎない生成の中において、本来の形相的存在を探り当てることこそが哲学の課題である。従って、この生成界は乗り越えられるべき一契機に過ぎない。これに対する生成の哲学は、

まさに生成変化や時間的存在をそれとして、その「積極的属性」(1260)において捉えようとする。形相的存在は何ら真の實在ではなく、生成についてのある見方、それも本質的に不十分な見方に由来する。時間は何らかの真實在からの「低減」を意味せず、むしろ時間こそが根源的存在様態なのである。

こうした二つの立場の対立をベルクソンが真に解消したかどうかについては、疑問の余地がある。しかし、他に還元されない「生成」に目を開くことになった『試論』が「生成」を「内的生」という一部分領域の事柄であるとしがちであった、つまりは『試論』では生成と非生成の対立が内界と外界の対立として實在なものに見做されていたのに比べ、『創造的進化』のベルクソンにとっては既に生成／非生成は哲学的見地内部での対立に過ぎず、存在論的には生成の一元論が確立していると言って良い。「*le chose*」などはない、あるいは働きの *actions* だけだ」(705)。この移行はいかにして果たされたのか。ここに『物質と記憶』の重要性が現れてくる。ベルクソンにとっては生成しない「もの」は生成に還元できるのであり、その点に関する理論上の要として身体が考えられたのである。別の言い方をしてもよい。結局『物質と記憶』は精神と物質 *matière* とを共に「生成」して規定していくのだが、身体 *corps* はそうした一般的な方向の内に端的に解消されないものとして論じられるのではない。つまり、単なる精神にも物質にも還元できないものとして身体にある特殊性が与えられているのではない。

私たちはそれを「身体性」と呼んでおこう。それはいかなるものであり、また「生成」といかに関わるものであるのか。こうした点を見ていくことで、以上述べた見通しを裏付けていくことにしよう。まずは『試論』に立ち帰って「生成」の在り方を規定しておくことが必要である。その上でこそ『物質と記憶』が解くべきであった問題の重要性が見えてくるだろうから。

2 生 成

未来・現在・過去を論じない時間論はあり得ないが、そこにおける変化の論じ方には二つのものがある。一見些細な点だが、この点の指摘から始めよう。第一の論じ方においては、未来から何ものが現在へと到来し、やがて過去に沈む、これが時の経過である。しかしベルクソンは基本的に逆の構図を前提とする。「過去から現在への進行 *progrès*」(366)、「未来を侵食し、前進しながら膨張していく過去の連続的進行」(498)など、この点について(4)の枚挙に暇はない。相對運動の記述にも似た、単なる語り方の違いだろうか。この二つの語り方の差異はしかし、ベルクソンにとっては無視できないものである。というのも、ベルクソンの生成観の本質にこの点は直結しているからである。

『試論』における生成 『試論』の英訳に際してベルクソンは『時間と自由意志』という書名を、内容に一層適しているものとして新たに認めている。しかし曖昧な主張である。いかにして時間と自由意志が関連しているのか。通常の考えによれば、時間は自由の問題には無記であろう。自由も非自由も、共に等しく時間の中で体験され得るものであろうから。『試論』の議論においていかに時間と自由とが結合し得たのだろうか。

最初に自由概念の側から考えてみよう。もとより『試論』の自由論は決定論への反論を一つの大きな要素として持っている(115-143)。しかし専ら自由概念の積極面に話を限り(106-114)、持続と自由との接点を考えるなら、言い換えれば『試論』第二章の議論から直接導かれる自由概念を規定しようとするなら、私たちはジャンケレヴィッチと共に「持続する自我」の持つ「全体性」にこそ着目せねばならない。実際、自由をそれとして提示する『試論』第三章の箇所において、「魂全体 *âme entière*」(109) や 「人格全体 *personnalité entière*」(113)、「自我全体 *moi tout*

entier」(109)といった表現が議論の要をなしていることは明らかであろう。ここからジャンケレヴィッチは「有機的全体性 *totalité organique*」の概念をベルクソン哲学の核心をなすものとして取り出した。この観点から『試論』の自由を解釈すれば即ちこうなる。「全体性」とはいかなる外面性にも無縁な存在状態である。従って「全体性」は、それに対する外部を持たないが故に、「自己決定 *se déterminer*」(109)をなす一つの「自発性 *spontanéité*」(144)として存在することになる。それは自我の何らかの能力ではなく、自我の在り方そのものである(それをジャンケレヴィッチは「自給自足 *autarkie*」⁽⁶⁾とも表現するだろう)。そして『試論』は、まさにこの「全体性」の概念によって、自我と諸動因の外面的併存を前提とする「心理的決定論」を乗り越えることができたのであった。

だが言うまでもなく問題は、何故そのような「全体性」概念が時間論から導かれるのかという点にある。時間が、あらゆる出来事が均しくその中に位置づけられる「場 *milieu*」、それ自身は諸出来事の内容に無記な「形式」に過ぎないのであれば、そこから「全体性」は出てこないだろう。「全体性」は単に時間の中で成立する一特殊内容に過ぎないだろうから。またベルクソン自身、純粹持続を提示する『試論』第二章の表題を「意識状態の多数性について」としているという事実は、ベルクソンが時間論と心理学とを混同していることを示すと思われましょう。

しかしながらベルクソンがまさに要求しているのは、形式ではないものとして、そしてまた具体的意識状態ともはや区別されないものとして、「時間」を考えることである。それは「順序」でも「数」でもない、形式化された途端に見失われる「流れること」そのものである。実際「順序」にしろ「教」にしろ、それだけを考察するならそこには特に流れて行くという意味合いが見いだされないのは自明であろう。数える作用 *formation* (57) は疑いようもなく時間的ではあっても、「形成された *formé*」数はその痕跡を留めない(このテーマは *evolution* と *évolué* の対立として

反復されるだろう)。「数」の持つ形式性に対する余剰として時間を考えることが問題なのである。

「流れること」に関するベルクソンの考えの骨格を、著作の各所で繰り返される議論から手短かに再構成すれば次のようになる。⁽⁷⁾ いわゆる時間位置において異なる(状態の個性化の最も強力な原理)ものとして複数の状態を考えよう。そこに「流れ」があるためには当然それら複数の項は同時に存在してはならない。かといってそれらの一つのみが純粹に排他的に存在してもやはり継起はないことになる。その場合に継起があるとすれば、それはどこかに綜合する者が存在しているということである。しかし綜合者を別個に立てることは大して役に立たない。まず、「綜合によって初めて成立する継起」は了解しがたい観念である。綜合される素材が既に何らかの意味で継起的に存在していなければ、その綜合から継起が生じるはずはない。また、事柄が時間的綜合に関わるのであってみれば、綜合者はそれ自身、継起に外的ではいられない。常に(「リアルタイムに」)継起につき従っているものでなければ、綜合する働きはその素材を与えられることすらないだろうし、またその綜合は結局非継起的な、同時的諸項の総括になってしまいうだろうから。かくして綜合者は、それ自身、継起的に存在し、つまり「流れ」ていなければならぬ。そしてその「流れ」の背後に再び綜合者を立ててもはや事態は変わるまい。「廻り道によっては持続に到れはしない」(457)とベルクソンが言うとおりである。だとすれば、継起は諸状態のある綜合であるとしても、その綜合は諸状態の「外から」なされるのではなく「諸状態自身の深いところから」(C II 287)発してくるしかないことになる。「真珠をつなぐ糸」(497)などは無用なのだ。しかしだとすれば、最初に諸状態を、複数性を構成する個々別々のものとして立てたことはそもそも適切であったろうか? 各々が個性性を保持した諸項がいかに自ら「流れ」を構成できようか? 諸項が流れて行くといっても、もはやこの場合、それらをフィルムのように交替させるためにどこか別のところにある「流れ」などを持ち出すことは無

意味である。諸状態自身において、「或るものが別のものになる、*devenir*」(141)ことがまさに必要なのである。

ベルクソンの言う「相互浸透」が指示しようとするのは、こうした事態に他ならない。状態の一つ一つが静的な個性を持つと考えることはもはやできない。また「流れ」⇨生成は、静的な同一性を持った要素とそこに加わる総合とから構成されるような何かではない。「同一の諸瞬間が互いに浸透しあうことなく立ち入れ替わる」ような時間とは「誤った観念」(66)なのであり、本来の「流れること」、「なること」としての時間は、そもそも「なる」ことの意味からして、生成していく連続的な異質性以外のことではないのである。「純粹な持続とはまさに融けあい浸透しあう質的変化の継起なのであり、明確な輪郭もなければ互いに対して外在化する傾向も持たない、そして数とはいかなる類縁性をも持たないものである。それは純粹な異質性 *heterogénéité* であろう」(70)。こうした「生成」は「明晰 *clair*」(81, 145)なもののだが、しかしここには区別された⇨判明な (*distinct*) 諸項は存在することができないのである。「その本源的な純粹性の内に見られれば、意識の諸状態の多数性は、数をなす判明な多数性とはいかなる類似をも持たない」(80)。それは「混紛とした *confuse* 多数性」(86)をなす。そしてこの非判明さは生成そのものに属するのであり、決して埋め合わされるべき欠如、認識の不完全さを意味するものではないのである。

こうして時間論と「全体性」、そして「自由」の繋がりを理解できよう。というのも以上見てきたように、そもそも生成が質的な内実を離れては生成ではあり得ず、またそこには外在化の傾向(それは生成を破壊するだろう)がないのであれば、生成は不可分の、つまりある全体性(そしてそれは形式的範疇ではない)を具えていることになろうからである。以上の点は、その生成が「内的」か「外的」かといった区分にはさしあたり何の関係もないことには留意しておいてよい。ただ、とは言っても、『試論』は内・外の通俗的二分法に基づいて「意識状態」の生成を特に問うだろう。こ

こから、主題は意識主体としての「自我」の在り方へと限定されることになる。そして、生成に關しては外的な統一者を立てられないしその必要もないのだとすれば、生成する意識状態に外的なものとして「自我」を立てることも意味を失うだろう。様々の機会においてベルクソンは自我の統一性の問題を論じているが、主張内容は常に同じである。複数的意識状態とそれらに外的な統一者、といった対立構図が否定され、「変化の不可分な連続性」(38c)こそが「自我」の内実かつ統一性をなしているというのである。念のため言えば、この「連続性」は、微積分学的な \mathbb{R} 数的なそれとは異なる。その種の連続性においてはやはり個々 \mathbb{R} 々の項が見出されるのであり、そこには生成は関わっていないからである。「持続の間」(ま)の数は無際限に増やし得るのだということを示そうとして、差異の概念に代えて微分の概念を持ち出して無駄である」(79-80)。(b)ここで問題になっているのはあくまで、実際に「が他に」 \mathbb{R} になっていくという生成的連続性なのであり、それ故にその分割は致命的である——つまりそれは「不可分な連続性」なのである。そしてこの不可分性、相互外的な部分の不在から、意識状態のなす「全体性」が導かれる。これが『試論』の言う「自我・魂・人格」の内実そのものであり、先に見たようにこれらには「全体 entier」の語が付されることになるわけである。こうして、自我についての連合主義的描像から発する心理的決定論、様々の動因の合成として意志決定を捉える考え方は「粗雑」(109)であるとして斥けられる。また同時に、様々の選択肢を自らとは別個の「もの choses」として眼前に置き、それ故にその間で「無関心 \mathbb{R} 無差別的に indifférentement」(116) 選択できもするというような自我とその「自由」の観念も否定される。

以上のように『試論』においては、「生成」としての純粹持続を軸にして、自我の「全体性」とそのような自我が享受する「自由」とが論じられたと言ってよい。(11)それと共にベルクソンは、「生成」と靜的な自己同一体(「もの」一般)と

の非両立性という構図を前面に押しだすことになった。『試論』における様々の対立の最も根本にあるのは生成（持続）と非生成（静的な自己同一体）との対立なのである。

さて、以上のように見てくれば、先に見た生成変化についての二つの語り方の差異も明らかであろう。第一の語り方は暗黙のうちに「もの」を前提しているのである。自らに同一な項は、それ自身他のものに生成していかないが故に、時間においては流れさっていくしかない。自らに同一な項は、突如として現在に到来するなどという自己発生を果たすことはないので、到来に先だって、未だないという形で、やはり存在することになる。こうした帰結はとりも直さず、未来の「可能存在」化や、さらには時間の仮象化としてベルクソンが徹底して拒否するものである。従って彼は、未来には非存在を割り当て、過去には生成としての「全体性」を割り振ることになる（現在については今は措こう）。ベルクソンの「過去」は流れ去るのではなく絶えず押し寄せてくる、未了相における存在である。彼にとっては、それが生成であり、持続であり、形式化以前の本源的時間なのである。

『物質と記憶』と生成 判明な諸部分を持ち得ない「生成」としての「自我」の姿を追ってきた後で『物質と記憶』に目を向けると、そこにはいささか人を戸惑わせる説が示されているように見える。あたかも「生成」が判明な諸記憶 souvenirs の連鎖であるかのような記述が見られるのである。ベルクソンは第二章で二つの記憶（力）*mémoire* を区別する。身体的習慣的な「反復し *répéter* 過去を演じる *jouer*」記憶と、もう一つの（身体とは）「独立した」記憶であるが、「生成」により深く関係するのは第二のものであるのはさしあたり明らかだろう。ところが、その記憶力が関わるのは「固有の個性性」（225）を具えた過去のあれこれの出来事の記憶である。そしてその「個性性」を定義するのは、その出来事の空間的状况Ⅱ「場所 *place*」と時間位置Ⅱ「日付 *date*」なのである（225-227）。

もしこれがベルクソンの最終的な見地であるとすれば、最悪の矛盾が彼の思想を覆うことになる。否定したはずの原子的かつ連合主義的な描像が再び立ち戻ってくると同時に、『試論』のあらゆる成果が見捨てられてしまうだろう。時間は再び個々の出来事に外的な形式に還元され、記憶は「真珠をつなぐ糸」になってしまい、「自由」な自我の非形式的な「全体性」は解消してしまおう(12)。

だが幸い、記憶力についての記述は更に深い水準でなされている。第三章になれば、心的状態はやはり「分割されざ一つの全体 un tout indivisé」(305)をなすものとして示されようし、『試論』で示された「全体性」も記憶や人格について回復される。「我々の人格の全体 personnalité tout entière は、記憶の全体 totalité と共に現在の知覚へと、分割されないままに入り込んでくる」(305, cf. 250, 287, 307-9)。従って先の、「個性性」を維持した諸記憶、という形象はベルクソンの決定的な立場におけるものだと考えられないだろう。また、記憶の時間的個性性の原理である「日付」||時間位置についても、それが記憶に即自的に付されているとは結局は言われない。時間軸上の「位置づけ」の問題についてベルクソンはこう述べている。「ある記憶の過去への位置づけ localisation は、言われているように、まるで袋の中に飛び込むように様々の記憶の総体の中に飛び込んで、そこから、当の位置づけるべき記憶を次第に近くから挟むところの記憶を取り出してくるなどということではない。……実際には、位置づけの過程とは、記憶力の拡張の努力なのであって、それによって、常に全体として自らに現前しつつ présente tout entière a elle-même 記憶力は記憶を一層広い平面へと拡張し、位置を見いだせないでいた記憶を、それまでは混紛 confuse としていた集塊のうちで、判明に区別 distinguer するのである」(310, cf. 371)。実際、「過去の出来事」の個体化に到る分割には様々のものがあり得ても、「それらのいずれもそれ自体には存在しない」、何故なら「心理的生の展開は連続的なのだから」

(913)。このように見てくれば、即自的な個性を持った記憶とその系列という形象は、むしろある作用の「結果 *Résultat*」(Me16)として考えられなければならないことは明らかであろう(ベルクソンのテーヌ批判)。そして今引用した箇所はその作用の一端を示そうとしているのだと言える。さしあたりここでは、『試論』の持続が『物質と記憶』にも形を変えながらも正確に引き継がれていることを確認しておこう。

3 身体性

では、『物質と記憶』独自の主題はどこにあるのか。

『物質と記憶』第二章は、ただ単に脳局在説を反駁するための実証的研究とされてしまえば、そのより深い含意を見失われてしまう。ベルクソンがそこで論じているのが「再認」であることは注意しよう。そもそも再認とは、ある存在を全くの特異性において受け取ることではなく、何らかの形で既知のものとの関連において存在を捉えることなのであるから、「AとしてのB」をその基本構造としよう。それを基本として、場合に依じて、BはAの「一例」であったり(人間としてのソクラテス)、「現れ」(灰皿としてのこれ)であったりするわけである。これはまさに同定の作用であり、つまり再認とは同一体がそれとして成立する場に他ならない。従って、再認を主題的に扱うベルクソンは、今や生成から目を転じて、それに対立するところの「もの」を論じ始めていると言つてよい。しかもそこで彼が検討しているのは失語症や失認症、即ち言語表現や事物についての再認可能性が、つまりまさしく「もの」の同一性が、崩壊している状態であった。例えば、「言語」はもはや単なる「音声連続体 *continuité sonore*」でしかなく、また、『試論』では何の問題もなく「教え」られていた時計の音が、シャルコの言語盲患者においては数的多数性を構成するものではなくな

ている(200)。ここにおいて、『試論』がある意味で自明としていた「外界の対象」や「言語」という「もの」たちは、根本的な二元性の片方の項たるだけの強固な存在を失う。

また、『物質と記憶』が同時に一般観念の問題をも扱っていることに注意しよう。そこにおいてもベルクソンは実質的に再認論と同じ主題を反復している。もっともそれは当然のことであって、先の再認の構造に登場するAとは、Bを規定しながらも原理的にBのみには限定されない何かであり、その意味で、ある一般性を具えた存在(それは場合に依じて「本質」や「実体」、「意味」であったりする)だからである。

さて、こうした点についての考察を通じてベルクソンが主張するのは、そもそも「もの」たちは再認に先だって存立する何かではなく、ただ再認において成立してくるものだということである。再認を司るところの「一般性」には発生の過程が(そして同時に破壊消失の過程が)ある。再認という事象から一般性の永遠性を論証しようとするいわゆるプラトニズムとは逆に、ベルクソンはそこから一般性Aの非永遠性を論じようとしているわけである。言い換えれば、彼にとっては、「もの」あつての再認ではなく、再認によっての「もの」なのだ。そしてこのような再認を可能にしているものこそ、私たちが本稿で「身体性」と呼ぶものなのである。ベルクソンの叙述に沿いながら、彼が『物質と記憶』において身体に与えている固有の機能を確認していこう。

ベルクソンは、発生論的に再認を論じることが、多くの場合一般性の先行的な存立を認めることに繋がってしまう道筋を正確に捉えているように思われる。具体的には、それは再認ならびに一般観念についての発生論的説明が常に論点先取に陥るといふ事態を意味する。「一般観念の周囲に生じた心理学上の困難をでき得る限り突き詰めてみれば、その問題は循環の内に閉じ込められていることが見てとられよう。一般化するためにはまず抽象せねばならない。しかし有

効に抽象できるためには既に一般化できなければならない」(297)。ベルクソン言うところの「唯名論」と「概念論」の双方に関わるアポリアである。

唯名論は個物たちに共通の名称が適用されるという事態のみから出発しようとする。しかし「語が〔複数のものに〕拡張され、しかもそれでいながらそれが指示する諸対象にだけ限定されるためには、やはりそれら諸対象が我々に類似を示し、その類似によって諸対象が集められつつ、その語が適応されない他の諸対象とは判別されねばならないだろう」(297)。諸対象の外延のみに一般性を還元するはずだった唯名論は内包なしには済まされなくなり、ここから概念論Ⅱ内包的抽象理論が登場することになる。そしてこちらの理論の中にベルクソンが見る困難は、内包、つまり類としての一般的性質へと、いかに個物の性質が媒介連結され得るのかというものである。「ベッドの白は積った雪の白ではない……それらが自らの個性から離れるとすればそれはただ、我々が両者の類似を認めて両者に同じ名を与えるときだけであろう」(297-298)。言い換えれば「諸性質は、共通のものとして現れるためには既に一般化の作用を受けていなければならない」(298)わけである。この困難を緩和しようとして、そこから共通性が抽出されるべき対象の外延をあらかじめ、しかも当然ここでは内包に頼らず限定することは、唯名論への無効な回帰であろう。こうして一般観念の発生は個物からは説明できないままになり、残る選択肢として永遠に存在し発生を問われることのない「形相」が現れて来かねない。但しその場合にも、形相と個物の関係は、例えば「分有」問題のような、基本的に同種の困難な問題を生むだろうことは言うまでもない。

当然、再認についても以上と全く同様に論じ得る。再認するためには既に再認の基準(A)が前もって与えられていること、しかも再認対象(B)の個性の中に、既にしてその基準そのもの(A)が現前していることが必要になる。結局、再

認は再認を前提していなければならぬ。

以上を踏まえてベルクソンはいかなる主張をなすのだろうか。

最初に絶対的に個体的な諸存在しか与えられていないのなら、以上の困難は実際乗り越え難い。さしあたってのベルクソンの見解は、問題の前提が誤っているというものである。個物の知覚が最初にあるという主張は「見かけの明白さにもかかわらず、真らしくもなければ事実にも即してもいない」(298)。では、最初に与えられるのは何か。同じ問題をベルクソンは『物質と記憶』直前の講義でも扱っているが、例えばそこではこう述べられている。「困難が取り除かれるとすればそれはただ、少なくともいくつかの抽象体が、精神の側の分離の努力なしに、出来上がったものとして、我々に示される場合のみである。少なくともいくつかの抽象体がそのように示されるなら、我々の知性はそれらを模範とできようし、他の抽象化とまた一般化も、これらの例の力を借りて共に生まれ出てこよう」(C II 390)。結局ここでベルクソンによって主張されているのは、出発点は諸個物ではなく「感じられ生きられた類似性」(300)だということなのである。あくまで諸個物から出発する立場にしてみれば相変わらずの論点先取とも当然言われよう。しかしベルクソンの議論の核心は、そうした「諸個物」こそ次第に成立してくる所産の側に属すものだという点にあることに注意せねばならない。

一見逆説的な展開である。以上のように論じることによってベルクソンは、まさに個物に先行するものとして一般的もしくは理念的な存在(A)を認めてしまったかのようなのである。これは非生成的な「もの」の哲学への逆行ではないだろうか？ 問題の全ては、ここでベルクソンによって持ち出される「感じられ生きられた類似性」とは何か、に懸かっているが、それについての規定を十分に獲得するに先だって、私たちはまずベルクソンの見解を辿り、そこに現れるだる

う「身体性」の規定をその機能においてとりあえず確認しておくことにしよう。

ベルクソンのさしあたりの答がいささか人を戸惑わせるものであることは否定できない。「類似性を取り出すのはこの場合、何ら心理的な努力ではない。類似性は力のように客観的に作用し、同一の反作用 *réaction* を引き起こす」(299)。そして「表面的には異なる諸作用への反作用の同一性こそ、人間の意識が一般観念へと展開するところの発端なのである」(300)。酸が炭酸分を含む鉱物に均しく反応するように、そしてベルが何で叩かれても同じ音によって応えるように(299, 298)。このような見解は、ほとんど批判にも値しないように思われようか。しかしながら「感じられ生きられた類似性」はそうした物理的反応に完全には還元されまいこともまた確かである。私にとっては物質と私の身体とは異なるものだから。ここでの「類似性」はまさに「感じられ生きられ、自動的に演じられて *jouée*」(300) いるものであり、つまり、反作用をなしているのは、「感情感覚の座 *siège d'affection*」であり「行為の源泉 *source d'action*」(299) であるものとしての「私の身体」であるという特殊性を持つ。最初に「類似性」を捉え「再認」を行うのはこのような「感覚運動性としての身体」である、とベルクソンは言いたいのだ。意識的な諸表象間の比較などの前に、常に「親しみ *familialité* の感じ」(299) が先行している。そしてこの「感じ *sentiment*」は身体的運動性と切り離せるものではない。例えば馴染んだ街を歩き回ったり、道具を用いるといった場合、少なくとも基本的な水準において身体は自動的習慣的に行為をなしている(296-297)。こうした表象以前の水準があるからこそ、よくあるように「見たことのあるのは解っているが思い出せない」、つまり比較項や同類の個物の表象に先だつた再認の状態が生じ得るわけであり、また実際精神言においては、再認の消失が道具使用などの動作の障害(失行症)と密接に結び付いているのである。そしてここに、「反復し過去を演じる記憶」として身体が論じられる直接の理由がある。つま

り目下の文脈において「身体性」とは、表象以前の反復性として規定されているのである。この点にはあとでまた触れよう。

また、ベルクソンは同時に、個の類への包摂を巡る先の問題についても基本的な答を与えてしまっている。彼の構図に従えば、最初に個物があるのではなく、類似性の先行的認知によって、連続性の中において個物がそれとして分節されてくるのである。例えば語の個性性。「聞かれた言葉の運動的随伴が、音の集塊の連続性を破断する」(325)のであり、この随伴とは即ち身体の反作用と言ってよい。その反作用によって、単なる音の連続体が、一般性の下での個体(比較を絶する絶対的個体ではない)、つまりこの場合は「語」の、連鎖へと変様されるわけである。こうした観点においては、かつて聞かれた語Mと先ほど聞かれたMとの間にいかに一般性を認め得るのか、といった(先ほど「白」については、た)困難な問題は、そもそも生じ得ないだろう。身体による類的把握がその把握と同時にそれらの語の個性性を切り出したのであってみれば、それによって成立したMとMは当然語として「同じ」語なのである。あるいは空間内の「物体 corps」という個体。体験様式に照らし規定される限り、それは「視覚と触覚の与件である抵抗と色彩が中心となつて、他の与件をいわば支えているところの、諸性質の体系」(332)であるが、そのような「体系」とは、身体の側での「反応系の対応物に他ならない(その反応系の整備こそ「感官の教育 *education des sens*」(197-8, 240)の目的である)」。この反応系の不備のために、開眼手術直後には連続的視像はあってもそこに個体はほとんど把握されないのである。ここでも身体による分節化が根底にあるわけで、結局「物体」という個体についても「語」と同様のことがあてはまる。あるいは、いわゆる「心理的諸状態」についても事情は変わらない。それらは、言語という「もの」や外界の「もの」たちの分節に従って、二次的に個体化され「もの」と化した存在であるから(『試論』以来の主題)。先に見たよう

な個性性を具えた過去の記憶 *souvenir* についても、その成立にはこうした作用が（少なくともその成立の端緒に）関わっていると言うべきではないだろうか。

こうして身体とは「知覚の質料性を変様する」(294)、つまり「実在の流れに感覚器官を差し向けるだけで、流れを規定された形態 *forme* へと結晶化する」(504)ものとしてベルクソンによって記述されることになる。また以上から見られるように、この基底的な水準においては、個体化と再認とは別のものではない。それ故に私たちは、再認における同一性と、個を包摂する一般性とを、区別せずに済ませられたのである。

言うまでもなく、以上の過程は最も基本的なものに過ぎない。「人間知性」は以上の基本的な一般性ないし同一性を「模範」としたり、それらを相互に結合したり、あるいはメタ化したりしつつ、更に抽象的な一般観念を産出していく (cf. 301, 630, 1302-3, C II 393)。ベルクソンによれば「そうした機構の総体が、分節言語である」(301, cf. M486)。こうして、感覚的な水準からいわゆる知的な水準に到る（ベルクソンはそこに断絶を見ない）様々の「もの」が、生成のただ中から析出してくるわけである。そして生成の方とは言えば、「もの」の自同性に対する余剰、「もの」の単なる偶然的付帯性として、回収されることになる。こうして、それ自身は生成に無記な「もの」が、生成変化の主語 *sub-jectum*・基底 *sub-stratum* として存在論的優位性を主張することになるだろう (cf. 759-760, 勿論ベルクソンにしてみれば「変化はあるが、変化の下に *sous* 変化するもの *chose qui change* があるのではなう」(1381))。こうした「もの」優位への逆転の諸帰結は膨大なものだが、その逆転の出発点をなすものこそ、他ならぬ身体なのである。「物質と記憶」において私たちが指摘しようとした「身体性」とは以上のようなものである。それは、「生成」と「もの」の二元性の交差点に位置しつつ、ベルクソンに「生成」の一元論への徹底化を許すことになった概念であっ

4 生成と身体性

それにしても、そのような身体と生成とはいかに関係しているのだろうか。ベルクソンが欲するように、身体以外の「もの」は生成から、身体の機能を通じて、析出してくるに過ぎないとしたところで、結局は当の身体こそが非生成的な「もの」になってしまったのではないか。その機能においてではなく、それ自身の存立様態そのものにおいて見られたとき、身体はどのように理解されているのだろうか。

先に、単なる物質とは異なる所以としての、身体の「感覚運動的 sensori-moteur」性格を私たちは指摘しておいた。また同時に、その身体的再認が本質的に「習慣」的なものとして理解されていることにも触れておいた。もう一度その点に立ち帰ってみよう。

習慣は身体的記憶の別名であり、それによって身体は再認されるべき一般性の最初の同定者として登場した。ところで習慣とは、個々の再認 \parallel 個別化を可能にしながらも、そうした現働化の背後に一種の潜勢 \parallel 力能として想定されるものである。ベルクソンは一見習慣を物質的特性（例えば酸への可溶性）に還元しているようではあったが、しかし彼自身の箇所で示唆するように、『物質と記憶』で言われる習慣とは、「歩いたり書いたりする習慣」(227)といった場合のごとく、「私の意志への依存関係の下に」(234)あり、そして「ある事柄を、実際に知り「でき」savoir、我々の裁量 disposition 内に保っておく」(231)ことを許すものなのである（「持つ」こととしての習慣 *habitude*）。*habitude*、身体的習慣が単なる物質性に還元され得ない最大の理由があると言ってよい。

しかしながら繰り返せば問題は、そのような習慣を非生成・無時間的な存在に基づかせずにいかに説明するかという点にある。「学ばれた記憶は、学課が身につくにつれて、時間の外に出て行く *sortir du temps*」(229)とベルクソンは言う。つまりこれは習慣が生成を脱して「もの」化すること、それと相関して、例えば読唱される「学課」という「もの」が堅固な存在を獲得するということなのだ、しかし勿論習慣が非時間的な観念界に属することになってしまってはならない。習慣もやはり「生成一般の中に」(223)、「実在そのものである生成の連続性の中に」(281)存在しているとベルクソンは言うのである。しかしその存在様態は、私たちが『試論』の純粹持続から導き出した「全体性としての生成」そのものと端的に同一視もできない。ベルクソンの表現によれば、習慣とは「絶えず再開する現在 *présent qui recommence sans cesse*」(292)に位置しているものである。さしあたり言い換えるとすれば、これこそ生成における習慣＝身体性の、そしてひいては「もの」の、根本的な存在様態を決定している当のものであり、そこにあるのは非生成性としての不動性ではなく、「反復 *répétition*」なのである。但しこの語は、いまだ問題を指示するものでしかないのだが。だとすれば、ますます身体自身の存立が問題になってくる。ところがその「絶えず再開する現在」という規定は、身体以外の物質一般にも与えられてしまっているように見える(281)。結局ベルクソンは身体と物質を同一視しているのだろうか？ しかし本稿の私たちは物質から身体を論じる用意を持っていないし、また、物質性はおそらくは身体経験のある極限としてベルクソンによって論じられていると思われる。そこで、物質性を巡る議論はここでは留保して、身体性に関わるもう一つの論点に進むことにしよう。私の身体固有の「感覚運動性」である。

習慣は反復・再開としての現在とされていたが、一方で「感覚運動性」もまた別の意味での「現在」の本質とされている (cf. 280-281)。主張はこうである。まず身体の「運動」については、それが今まさに起ころうとしているもので

あり、その意味で現在と不可分と言える。では「感覚」はどうか。私の身体運動は無から生じるわけではなく、「感覚」に由来しそれが「延長 prolonger」されたものである以上、「運動」に不可分であり現在である。こうしてこの「感覚」と「運動」との「分割されざる全体」(280)が、「私の現在」とされることになる。「私の現在は本質的に感覚運動的である。つまり、私の現在とは、私が私の身体について持つ意識である」(281)。これはまた、「私の現在」が「ある厚み」(216)を具えているということでもある。そしてここに感覚運動性としての身体Ⅱ現在の特殊性がある。その故に、身体の「現在」は「もの実際の諸瞬間ではない」(216)とも言われているのである。

では、こうした意味での「現在の厚み」がいったいかにして「習慣Ⅱ反復」という存在状態と関係しているのだろうか。確かに両者とも「現在」の語に結び付けられてはいるものの、その内実は必ずしも同じではない。両者を統一的に理解する手がかりがなければなるまいが、以上からする限り私たちはそれを「感覚」に求めるしかないだろう。というのには、「もの」の再認Ⅱ個体化の最初にあるのが習慣的な「感じられ生きられた一般性」であった以上、そこには「感覚」が深く関わっていようからであり、また、私の身体の反作用が、単なる物理的反応に尽きないある「厚みを具えた現在」において成り立っているとすれば、やはりここでもその「厚み」を構成するものとして「感覚」が重要となつてこようから。つまり、身体性の更なる検討のためには、「感覚」をめぐるベルクソンの記述へと進むことが必要なのである。以上を補足しつつ進んでいくことにしよう。⁽¹³⁾

第一点。この「感覚」は、それが登場してきた文脈から明らかなように、『物質と記憶』第一章で言われた「感情感覚 affection」として理解されよう。感情感覚は身体内部に位置づけられるもの、いやむしろ正確にはそもそも身体という「イメージ」を限定する標識の最たるものであったから。さて、第一章の記述(201-206)からするなら、それは他

の「イマージュ」の「現実的作用」(305) (身体への接触と侵入) の所産、従ってある種の受動的結果であると思われるでしょう。しかしながら、確かにベルクソンは「痛み」しか主題的に論じてはいないとはいえず、「感情感覚」は決して痛みだけに限定はされ得ないということは明らかであろう。つまり、実際の身体運動の手に感じられる躊躇感や運動への傾向の感じ (cf. 169-170)、『落ちつかない』(954) などが通常の「感情感覚」なのである。だとすれば、感情感覚を単なる受動的反映とすることはできない。そもそもよく見るならば「痛み」すらも、蒙られた作用の結果ではなく、あくまでそれに対する(局所的かつ無力ではあれ)「努力 effort」(204, 206, 364) として理解されているのである。

第二点。「感覚」が持続の「厚み」をなす所以はそれが運動と不可分に結び付いているという点にあったが、それと相関してベルクソンは「感覚」を「直接的過去」(280) として規定している。ベルクソンによれば、「厚み」なき「純粋な現在」とは、「捉え難い insaisissable」(291) 「逃げやうなく fuyante 境界」(917) であり、「現在をして、過去を未来から分かつところの不可分な境界と理解するなら、現在の瞬間ほど存在しないものはない」(291)。にもかかわらず、私たちが「現在こそは存在するもの ce qui est と定義して」(291) しまうほどに「現在」は確固とした存在を有しているように思われるとすれば、それは、この「現在」が「純粹」ではなく「感覚」の「厚み」を備えているからであろう。「厚みを持った現在」とは、もはや「捉え難く」もなく「逃げ去り」もしない、最初の「使用可能なもの chose utilisable」(327) なのだと言えるかも知れない。では、「直接的過去」としての「感覚」はいかにしてそのような「現在」を構成しているのか。

「直接的過去」を規定するベルクソンの議論は二重である。一方にはこの感覚の過去性を、物質の継起的諸瞬間の保持として提示する議論がある(216-8, 291-2)。微視的に見れば一層等質的な諸振動へと還元されるであろう物質を、私

たちは巨視的な水準において一個の感覺質として捉えており、後者は前者に照らせば既に過ぎ去ったものの保持総括と言えよう。それ故に感覺は直接的過去だ、というわけである。この巨視的把握こそ私たちの知覚の本質的機能である。「知覚の第一の機能はまさに、要素〔元素〕的諸変化の系列を凝縮の働きによって単一の質ないし状態として把握する」とある(749)。そしてこの「把握」された「単一性」こそが、「私の現在」という原個性を構成する。

しかしこうした議論は、そのままでは『試論』から辿ってきた生成変化の記述とは必ずしもうまく折り合わない。まるで即自的な継起としての物質界に付け加わって、その継起を受容的に保持するところに記憶ないし持続が存するかのようなのではないか。更に言えば、ここでは現在が流れさって過去になるという構図が前提となってしまう。そしてその「流れ去り」の構図の根底には、自己同一的であるが故に生成できない「もの」が、つまりこの場合は「時点」としての「現在」が、存するのであった。即ち、それは今問題になっている「厚み」を具え「もの」と化した「現在」から派生する形で更に説明されるべき事柄なのである(物質の存在は、「身体の現在」から出発して、それを細分化することを通じて、論じられていると思われるのはこうした理由による)。だとするなら、そうした構図そのものが成立する場面を扱おうとしている目下の私たちの関心には、以上のベルクソンの説明は満足すべき答を与えないだろう。

とはいえ他方で、「直接的過去」には別の文脈が与えられていることを見逃すことはできない。この文脈においては、「直接的過去」は流れ去りつつ保持される何かなのではない。「運動はこの感覺から由来し、感覺を行為へと延長するprolonger」(280-1)と言われるように、また何よりも『物質と記憶』第二章で「記憶の現実化」を扱う箇所全てが前提しているように、感覺はついですぐさま運動へと「なる」という意味で「直接的過去」なのである。私たちは先にベルクソンの生成観と、そこにおける「過去」の意味を確認しておいたが、目下の文脈では正しくその意味において感覺

は「過去」とされているわけである。実際、感覚が行為へとまさに「延長」されようとするものでなく、単にもはや流れきってしまったものに過ぎないのだとしたら、どうして感覚＝直接的過去がわざわざ特権的な「存在」と見なされるほどの重要性を持つことがあり得よう (cf. 25-6)。

この第二の文脈において初めて、次に見る重要な一節も理解可能なものになろう。『試論』以来の「生成」は『物質と記憶』においては非身体的な「独立的記憶」に名を変えていたことを私たちは見た。また、「もの」の成立の最初に身体的習慣的要因が存しているのは今見ている通りである。つまり私たちは以上で『物質と記憶』言うところの二つの「記憶力」を順に辿ってきたことになるのだが、両者の（再認や疾病における事実上の関係ではなく）本質的な関係可能性の構図は未だ論じられていなかった。ベルクソンもその点を第三章で「我々は両者の繋がりを示しては来なかった」(292)と確認しつつ、こう述べ始めるのである。「しかしもし我々が知覚するのは、直接的過去以外、何ものでもなく、我々の現在についての意識は、既に記憶であるのなら、我々が最初に分離しておいた二つの項は密接に結び付くことになる」(292, 強調筆者)。この極めて重要な箇所の前提部分の言わんとするところも、今やある程度明らかであろう。即ち、身体感覚はそれ自身生成していくものとして、「自我全体」ないし「独立的記憶」の／＼という「生成」の「最も新しい延長 dernier prolongement」(224)として、理解されるわけである。この限りで、それらは「分離した二つのものをなすのではない」(239) ことになり、ベルクソンはこうしてかの円錐の図式を描くことができるようになる。但し、だからといってこれで両者の関係が自明になったわけではない。感覚の側には、あらゆる再認の基礎たる反復性という異質な存在状態が属しているのであり、私たちが理解したいのはその状態の由来なのだから。

しかしながら、以上二点において確認してきたように、感覚を何らかの受動的反映ないし結果としてではなく、「自

我全体」の／という「生成」の側から理解できるのだとすれば、感覚と、身体の反復性とを繋ぐ関係も想定可能になってはこないだろうか。つまり、「全体性としての生成」には、それ固有の力能として、自らを感覚化し、またそれと同時に自らを反復することが、含まれているのではないだろうか。そしてそれによって身体は、物体に還元されない、「も」を成立させる特権的機能を保持するところの、「全く別の秩序に属する経験」(227)の定位点となっているのであるまいか。ここで私たちが特に念頭においているのは、「記憶の諸平面 plans」の概念である。かの円錐の諸断面の図式が想起される(302)。「同じ心的生は、記憶力の継起的な諸段階 *étages* において無数回反復されよう」(250-1)。⁽¹⁶⁾念のため言えば、この「反復」とは、既に個性性を具えたあれこれのエピソードの再現ではなく、「我々が生きた諸経験の全体 *totalité* の包括的かつ多様な反復」(371, cf. 307, 309)である。時間を「現在」の交替とする観点にとってはおそらく異様な「反復」観念であろうが、ベルクソンにとってはこの「反復」の諸平面の横断ないし絶えざる新たな創造 (cf. 《Créer à nouveau sans cesse》, 371)こそが「通常の我々の心的生」(307)なのである。さて、ここで私たちが特に注目すべきは、まさにこの「反復」の諸段階の極限として身体が考えられている点である。こうした解釈のもとでは、「習慣」は単なる物理的機構であるよりはむしろ生きられた「感覚運動的状态」(307)であり、そしてその状態(即ち「厚みを持った現在」とは、過去の生の、極限にまで「縮減 *réduction*」(308, cf. 251)された相における反復に他ならない。先に少し触れておいたが、記憶力とは「常に全体として自らに現前して」いる。その「現前」の最も「縮減」したものが「感覚運動的状态」なのである。しかも注意すべきだが、ここでの「現前」は、通常の意味の「現在」≡流れ去る一時点における現前とは異なる(もし同じだとすれば、生成変化は現在に還元されてしまおう)。生成には「現在」以前の自己現前があるのだ (cf. 250)、しかも様々な「平面」における多様な現前が。おそらくそれ

こそがベルクソンの「直観」の原型であって、それは身体の「現在」が否応なく一般性の下に「もの」を捉える、つまりベルクソンの意味で「分析」することとは根本的に別のことなのである。

さて、以上のように考えられるなら、力能としての「習慣」という存在状態の基礎にあるのは、他ならぬ「生成」であることになろう。「身体」の記憶とは、過去の本当の記憶がその基礎 base をなしている準瞬間的 quasi instantané な記憶である(293)。これを言い換えればまさしくこうなる。「習慣」とは、「生成」が自ら縮減しつつ反復するところの「感覚」―「厚みを見えた現在」である。こうした背景がないとしたら、「習慣」は「持続する自我」の力能であることを止めてただの「酸への可溶性」などと同列の性質になり、その座としての「我々の各々が自分の身体と呼ぶところ」の特殊なイマージュ(212) はもはや自分の「身体」とは呼ばれなくなってしまわずである。

5 最後 に

『物質と記憶』においては、ほぼ以上のような道筋で、「もの」は「身体」へ、「身体」は「生成」へと、その成立根拠を与え返されているように思われる。勿論以上は基本的な存立の条件についての溯行的な考察であるから、個々の身体「習慣」や「もの」たちの具体的成立過程については何も述べていない(そしてそれらの崩壊については尚更である)。また、「もの」から逆行する形で「身体」や「生成」が別様に解釈されていくその内実に触れることもできなかった。いずれもベルクソンにおいて重要な主題であるが、本質的な構図をほぼ確認し終えたことで満足し、そうした主題については稿を改めることにしよう。

ともあれ私たちが最初に述べたように、『物質と記憶』において、ベルクソンは「生成」の存在論的優位性の構図を基

本的に提示し終えることになる。そして「形相・もの」を「生成」へと帰着させる過程において極めて重要な位置を占めていたのが「身体」であった。これが本稿で私たちがまず確認しておきたかった事柄である。確かに私たちも、「形相」と「生成」を巡ってのベルクソンの立論が最終的であるとまでは考えない。例えば真理論や科学論、言語論などにおいて、彼の哲学は、「生成」優位という基本的立場の故に、多くの本質的困難を抱えてしまっているだろう。しかし、彼の基本的立場そのものを端的な誤りとすることができようか。永遠性不動性の理念を最初から持ち出すことなく思索しようとするれば、遅かれ早かれベルクソンが「もの」と呼んだ諸存在の「発生」を問わずには済まされない。ベルクソンの試みをどう評価するにせよ、彼の困難がその「発生」に関わるのであれば、その時には私たち自身が自力でその困難を解かねばなるまい、そのことは確かである。

注

ベルクソンの著作等からの引用・参照箇所については適宜頁数を挿入した。数字のみであれば生誕百年記念版著作集の頁である。数字の前に記号がある場合、Mは *Mélanges* の頁数であること、またC IIは講義集第二卷 (*Cours, volume II*) の頁であることを示す。いずれもPUF版である。

(1) J. Hypolite, "Aspects divers de la mémoire chez Bergson", in *Figures de la pensée philosophique*, PUF, 1971, p. 472. 勿論この研究は今日でも『物質と記憶』についての最も正確な読解の一つであり、本稿もこの研究に多くの点を負っている。

(2) 実際には一九〇〇—四年の講義を通じてこの自己了解が確立したと思われる (cf. 725 note).

(3) 従ってベルクソンの「もの」は通常「本質」と言われるものと非常に近いが、しかしこれは一見そう思われるほど奇妙な用語使用ではない。というのにも後に見るように、ベルクソンにとっては、「もの」はいつも不動の「本質」と不可分に構成され

- るからである。
- (4) 第一の引用の主語は「記憶」第二は「純粹持続」である。
- (5) 「衝力でも引力でもなく」(1072)つまり情性でも欠如でもない、自足した生成固有の「躍動 élan」概念はここから生じたと言つてよい。
- (6) V. Jankelevitch, *Henri Bergson*, PUF, 2^e éd., 1959, p. 207.
- (7) 参考箇所を挙げる。66, 70, 74, 497, 1407, 1412, またとりわけ C II 287, 289°。
- (8) 念のため注意すれば、等質性とは同一性ではない。他との比較や加算が可能なら、従って共通の場の限定として成り立っている、ということが等質性の意味である(外延量の定義)。従って逆に、ここでの「純粋な異質性」とは、共通の地を持たないものでありながら「連続的」であるという、極めて奇妙な概念であることになる。
- (9) ベルクソンの出発点が実証科学の基礎論であったことが、その直接の理由であろう。
- (10) ベルクソンと微積分学との関係は微妙である。こうした問題の見取図としては、次を参照。J. Millet, *Bergson et le calcul infinitésimal*, PUF, 1974.
- 但し、もしベルクソンが素朴に微積分学の「運動的解釈」を採ってそれに基づいて微積分学をありうべき「生成の学」のモデルとしたのであれば、数学的観点からなされる Benda らの批判が有効なものにならう(同書一四七―九頁参照)。
- (11) 非決定性・予見不可能性・創造性などは一応全て生成変化の諸側面として理解される。例えば『創造的進化』冒頭(495-500)の議論の運びなどを見よ。実際、創造としての自由概念は比較的遅く成立するものである。
- (12) こうした棉結を避けようとする限り、記憶力 *mémoire* と記憶 *souvenir* との関係も外的なものではありえない。ここでもジャンケレヴィッチの解釈は示唆に富んでいる。彼は生成変化そのものを構成する本来の記憶力を「継続 continuation」と名付け、自らの外的なものとして過去を捉える記憶力を「保持 rétention」として区別する(前掲書四七頁)。こうした区別の裏付けとなるベルクソン自身のテキストとしては 298 などを参照できるが、そもそもベルクソンの有名な「過去はそれ自身において保たれる」(290, 498, 1315)という主張は、生成には外的な統一者が不要であることの別の表現に過ぎない。記憶力は「継続」、生成そのものなのである。
- (13) 『物質と記憶』の含む用語上の混乱の最大のものとして、I' perception, II' sensation, III' affection の間のそれを指

摘しないわけにはいかない。特に第一章においては一と三の区別は本質的なのだが、その区別は必ずしも維持されておらず、共に二で指示されていることが多い（特に第二章）。私たちはそれらの定位される位置（身体内外）などを示す文脈に照らし、そこから分類と議論を再構成することを余儀なくされる。幸い以下の議論の要は「直接的過去」という時間的性格にあり、これは三者いずれについても共通なので、これらの混同は私たちの論旨の本質には関わらない。

(14) この「諸平面」に関する最も明快な解釈としては、G. Deleuze, *Le bergsonisme*, PUF, 1966, pp. 58-69. を参照。また、彼を始め多くの論者が正当にも指摘するように、ここで問題になっている「反復」とは、心理学的「もの」としての「イマージュ」の成立以前の、非心像的過程である。この「反復」が、「もの」の系列としての時間とそこにおける反復Ⅱ「もの」の再来、といった構図によっては理解できない（またそもそもできてはならない）消極的理由は、そこにある。

（博士課程学生）